



タイトル	グレートトラバース 日本2百名山ひと筆書き
著者	たなかようき 田中陽希
出版社	NHK出版
発売日	2016年6月25日
ページ数	285頁

著者は、おなじみ Team EASTWIND のプロアドベンチャーレーサーである。

深田久弥の随筆「日本百名山」で百の山を選定するにあたり厳選した山は146座あった。百名山に入らなかった46座はその後、深田久弥の遺志を継ぐ愛好会・深田クラブによって、新たに54座が加えられ、「日本2百名山」と呼ばれる100座になった。

2014年10月26日、209日間7800kmにも及ぶ旅を成し遂げた著者（日本百名山ひと筆書き）は、それから210日後の2015年5月25日に、北海道の宗谷岬をスタートし、九州最南端の佐田岬をゴールとする、「日本2百名山一筆書き～グレートトラバース2～」の旅に挑戦した。

総距離8000km以上、累積標高差およそ110,000m！本書は、日本の冒険史と山岳史に残る、前人未到の日本縦断に人力のみで挑んだ222日間のセルフ・ドキュメントである。

目次をみよう。

プロローグ

再始動

スタートラインへ

第1章 脱出できるのか！？ [北海道編]

10座

第2章 空梅雨の東北 [東北編]

19座

第3章 焦り・苦悩の日々 [関東・甲信越編]

25座

第4章 秋の日本アルプス・激しいアップダウン [日本アルプス編]

23 座

第5章 緊張からの解放 [北陸・関西編]

11 座

第6章 俺はやりとげたぞ！！ [四国・中国・九州編]

12 座

エピローグ

3度も応援に来てくれました。

子どもの素直

みんなの声を成長の糧に

222 日間の行動記録

日本2百名山一筆書きの歩み

あとがき

少し、中を覗いてみよう。

身体や服からは獣の臭いがする。宿に行けば3日ぶりのお風呂と洗濯ができる。獣になりつつある自分が人間に戻る、そんな感じだ。

非日常的なことをおよそ2年間も続けているので、当たり前のことだとか気付いたりするようになってきた。なんでこんなボロボロになってヤブを漕いでいるのだろうと思うけれど、そんな世界を体感しているからこそ、温かい風呂に入ったり、布団で安眠できる当たり前の日常に生きている喜びを感じる。安心する。極度の寒さを感じるから、太陽のありがたみを感じ、夏の暑さを感じるから、冬の雪を恋しく思う。雨が続けば、晴れの日の^{すがすが}清々しさを感じ、晴れが続けば、雨乞いをする。旅を続けることの意味は、こんな考えが持てるということにもあるのだと思う。

赤石岳の避難小屋の壁に「山を想えば人恋し 人を想えば山恋し」という、北アルプス開拓の先駆者である百瀬慎太郎の言葉がある。自然のど真ん中に行くからこそ、人里に下りてきた時の安心感と人の温かさを実感するものだ。……(第1章)。

筆者を応援する人も多種多様だ。こんな人もいる。

東北の^{もりよしざん}森吉山に登る日の早朝4時。突然部屋をノックする音で目が覚めた。宿の方かと思ったら、見知らぬ男性がヘッドライトを付けて立っていた。「田中陽希さんですか？」寝起きだったので状況が飲み込めなかったが、どうやら応援の方らしかった。「これ持って行って」と差し出されたのは瓶の日本酒だった。

筆者は旅の途中で酒は一切飲まないという。ましてや重い液体で、さらに瓶は問題外だ。丁寧にお断りしたが、「ならば撮影班に渡してほしい」ということで諦めてくれない。

撮影班と筆者は完全に別行動である。お互いの姿は見えているが、干渉は一切しない。一粒のコメも、水さえも分けることはない。筆者が番組に出演しているということではなく、NHKが筆者の旅をドキュメンタリーで追っているという形なのだ。

一呼吸置き、やんわりと「今何時かお分かりですか？これから山に登るので日本酒を受け取ることはできません。お気持ちだけでもいいですか？」と言って何とか納得していただいて帰ってもらった。さすがに朝早すぎるでしょう。

今回の旅で、筆者の応援者への接し方がどんな風に伝わっているのだろうかとずっと考えていた。迷いでもあった。本当に色んな方がいたので、どんな接し方をしたら一番喜んでもらえるのか判らずに悩んだ。もっといい言葉があったのではないだろうか？もっと笑顔で受け答えした方が良かったのか？みんな考え方や価値観が違うのだから、すべての方に合った接し方が出来るとは思っていないが、お互いが心地よく終われる接し方の気遣いはできるはずだと思った。……(第2章)。

出発時間ぎりぎりまで、ルート調整を行い、甲州へ向かって出発した。八ヶ岳の山麓でペンションをやっているおじさんと一緒に歩いたり、小学校の校庭に電話ボックスがある不思議な光景を目にしたりしながら、茅ヶ岳かやがだけの中腹を回り込んで、夏休みが終わって静まり返ったホテルに宿泊し、一夜が明けた。今日から9月だ。日本アルプスでは秋が始まるだろう。

茅ヶ岳といえば、深田久弥の終焉の地として知られている。グレートトラバースをやろうと決めた時から、「百の頂に百の喜びあり」という深田久弥の言葉を忘れることはなかった。茅ヶ岳が2百名山であることを知ったときは驚きと嬉しさが湧いた。深田久弥に百名山の旅が達成できたことを報告し、感謝を伝えたい。これは旅のスタート前から目的の一つとしていたことだ。

落石が多いと言われる女岩まで谷底を登っていく。雨雲と密集した木々の影響で、樹林帯の中は日の出前のように薄暗い。急な登山道を登ると、ようやく明るくなり、標高も1700m近くになった。登山道が緩やかになった頃、目の前に深田久弥終焉の地の石碑が現れた。……(第3章)。

評者が登った大日ヶ岳だいにちがたけ(1709m)には苦い思い出がある。笹藪とはいろんな付き合い方があると思うが、一番大切なのは笹藪とケンカしないことだ。油断すると目などを攻撃されると著者は言う。

評者は、登山道を少し外れて大日ヶ岳を登っていた。最初は、腰の高さ程度の笹藪であったが、足元がはっきり踏み固められていたので。安心して登山を続けていた。

登るにつれて、踏み固められた道は変わらないものの、背丈をはるかに超える濃厚なヤブとなり、前後、左右と上方が見えなくなり不安が募った。足元以外周りは何も見えない。

そうこうする内に、すぐ近くで「ザザッ」という動物が移動する大きな音と「ウーッ」

という唸り声に「しまった。熊だ!」。と一瞬立ち止まる。次の瞬間「ザザッ」という動物が立ち去る音にほっと安堵する。濃厚なヤブだったため、目を合わせることがなかったのは幸運であった。しばらく登るとやっと視界の開けた正規の登山道に合流し、ほっとする。

山頂には登山客は一人もいなかったが、盛夏の山頂では赤とんぼの大群が評者を迎えてくれた。下りは、熊に会わないように安全を見て、明るい正規のルートで下山した(第5章)。……………。

昼過ぎ、つるぎ町の一字という集落で、一軒の蕎麦屋から漂うダシの匂いに誘われて暖簾をくぐった。店の名前は「そばごや」。山間にひっそりと建つ山奥の蕎麦屋だ。

店に入るとおっとりした感じのおばちゃんと、山男という雰囲気のおじちゃんが「はい、いらっしゃい」といった。あまりに静かな雰囲気だったので、思わず「やっていますか?」と聞いてしまった。田舎の時間が流れていた。

「どうぞ」と言われて席につく。注文をと思い壁に目をやると、「ざるそば大、小」と「かけそば大、小」だけだった。こんな^{いきぎよ}潔い蕎麦屋は初めてだ。心の中で「いいね〜」とつぶやき、少し寒かったので、かけそばの大を頼んだ。

店内には、数多くの振り子時計や掛け時計が壁に掛けてあった。聞くと、ご主人は以前、町で時計屋を営んでいたらしい。一字で蕎麦屋を始めてから15年の間に、どんどん過疎化が進み、空き家になった家から時計だけをもらい受けて修理し、持ち主がいなくなった今も、この蕎麦屋で時を刻み続けているのだという。寂しくもあり、それが今の日本の田舎の現実でもあることをしみじみと感じる。

数分後、ネギと刻んだ油揚げがトッピングされたかけそばが出てきた。関東の濃い醤油味とは違い、ダシが効いた上品な薄味で旨かった。

「今は、この辺の人口は800人くらいになってしまったよ。50年前は8000人はいたんだけどね。昔は、林業やタバコなんかを育てる仕事があったから、人が出ていくことは少なかったけど、今は、若いもんが戻ってきたくても仕事がないから、皆町へ出てしまうんだよ。

そばごやのおじちゃんとおばちゃんは、あと数年したら自分たちも町に下りると言っていた。一字の中心部を通ると、昔はたくさんの方が住んでいたことが判る。廃校や人のいない団地、お店が狭い谷間に寄り添うように建っていた。風情ある一字の集落だが、50年前のにぎやかな一字を見てみたかった。田舎の過疎化は止まらないのが現実だ。(第6章)。……………。

2百名山完全踏破を成し遂げた著者は、チーム イーストウインドと合流し、本業であるアドベンチャーレーサーとしての活動に戻る。2016年2月に、チリで開催される国際大会、地球の果て・南米パタゴニアの耐久レース(パタゴニアン・エクスペディションレース)に参加する。約7か月間、8000kmの旅をしてきたとはいえ、トレッキング力だけで勝て

るレースではない。マウンテンバイクやシーカヤック、ロープアクティビティ、ナビゲーションといった多種目競技の総合力を以って世界の猛者達と戦うことになる。マウンテンバイクについていえば、旅をしていた期間の丸2年、一度も乗っていない。

レースは、昼夜関係なく1週間ぶっとおしで続けられ、各国チームのメンバーは4人。その内一人は女性選手であることが条件。チーム力が試される所以である。

- ・逆風のマゼラン海峡、
- ・ヤブと湿地の草原、
- ・氷河からの荒れ狂う激流、
- ・カヌーでフィヨルド横断、
- ・そして大岩壁、

と幾多の難関が待ち受ける612kmの道のりを、人力だけで、10日以内に駆け抜けなければならぬ。

評者は、幸運にも、このアドベンチャーレースをNHKのBSプレミアムで見ることが出来た。人間が行うレースとは思えない内容で、見ていだけで内容の過酷さに疲れてしまった。

2016年11月、アドベンチャーレースの最高峰となるワールドチャンピオンシップが、オーストラリアで開催される。著者は、『これからも日本の代表して、世界のステージで日の丸を掲げるべく、挑戦を続けます。チーム イーストウインドへの応援をよろしく！』と「あとがき」に記し、本書を閉じている。

NHKの番組や朝日新聞の記事は、ある理由により好きではないのであまり見ないが、NHKで放映される著者の番組だけは欠かさず見ている。すでに後期高齢者の仲間入りを果たした評者は登山はもうやらないが、テレビの画像を見ながら、気持ちだけは著者と一緒に登山している自分を発見する。時々、「おいおい、ちょっと待ってよ」と声をかけたりする。

2016.8.12